

プロジェクトアドベンチャー（PA）を中心とした人間関係づくりに関する研究 - 異年齢集団での交流活動を通して -

宇部市立吉部小学校 教諭 藤富 佳子

1 研究の意図

山口県教育委員会が実施している青少年自然体験活動推進事業（チャレンジプログラム等）では、多くの子どもたちが、仲間とともに直面した課題に向き合い、協力して乗り越える体験をしている。この体験活動では、人間関係や学校生活に悩みを抱えていた子どもたちが、山口県版OBS（アウトワード・バウンド・スクール）のプログラムの下で、異年齢集団で生活経験を生かしながら体験活動を終えた後、思いやりの気持ちを深め、自分自身を肯定的にとらえることができるようになった等の報告がされている。このことから、小学校の異年齢集団での交流活動にも効果的な体験活動を取り入れることで、児童の自己肯定感や対人関係能力を向上させることができるのではないかと考えた。プロジェクトアドベンチャー（以下PA）の教育手法は、OBSの教育手法を地域社会や学校へ取り入れるために開発されたものであり、学校教育でも学習の中に冒険の要素を含んだ体験活動を仕組むことができることに特色がある。また、山口県には、OBSやPAの教育手法を取り入れ、山口県独自の取組として開発された体験学習プログラムとしてAFPY(Adventure Friendship Program in Yamaguchi)があり、個人や集団のよりよい変容をめざして学校教育で活用されている。

そこで、本研究では、異年齢集団での交流活動の特性について検討し、PAの教育手法を用いた異年齢集団での交流活動の組み立て方とその有効性について考察する。この交流活動を通して、学校で取り組むことのできる人間関係づくりについて考え、児童の自己肯定感を高め、対人関係能力を向上させる支援の在り方について探ることとした。

2 研究の内容

(1) 異年齢集団での活動の特性

異年齢集団での活動は、同年齢集団での活動に比べて、対等の立場で競い合うという雰囲気は少なく、その活動は、能力や経験等の相互の違いを尊重しながら展開されることが多い。そのため、異年齢集団での活動は、個人がもつ特性が重視され、それを発揮し合うことができる条件を備えているといえる。したがって、子どもは、同年齢集団にはない多様な人間関係を経験することを通して、自分自身を様々な視点からとらえることができる。また、それぞれの違いを尊重し、特性を十分発揮し合うことにより、互いに認め合い支え合う大切さを学ぶことができ、

その違いを集団の活動目標の達成に向けて有効に活用することができるという利点もある。つまり、異年齢集団での活動は、互いに認め合い支え合う支持的な温かい雰囲気の中で、子どもに社会性を養うとともに、個人と集団の成長を図ることが期待できると考える（図1）。

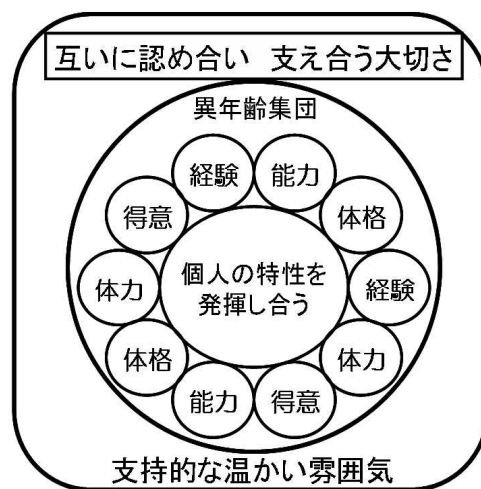


図1 異年齢集団での活動の特性

(2) 長期自然体験活動の実践事例

ア 長期自然体験活動の概要

長期自然体験活動（チャレンジプログラム等）は、集団による体験活動を展開していく、自然の中での長期移動キャンプである。この活動の特徴としては、異年齢集団でのグループワークを基本として活動すること、グループ全員で話し合って目標を決め、互いに協力してやり遂げた後に活動を振り返るといった体験学習の循環プロセスを繰り返しながら個人や集団全体の成長を図ること、子どもたちの自己意識を向上させ自信を回復させることの3つが挙げられる。この活動においては、自然環境に配慮しながら参加者の自主性、自立性を尊重した支援を行い、OBSの教育手法を取り入れた山口県版OBSプログラムを活用している。

この体験プログラムには、小学生対象のチャレンジプログラムと中学生及び高校生対象のクエストプログラムがあり、メンバーは、どちらも1グループ8人で構成される。子どもたちは、体験活動に参加する目的を考えながら、効果的に組み立てられたプログラムに従って、目標に向かって仲間とともに活動を積み重ねていくことにより、次第に課題を克服する力を身に付けていくことができると考える。

イ 長期自然体験活動の実践事例

子どもたちは、自然の中で、新たな人間関係を構築して生活していくこととなるが、慣れない野外での生活とともに、初めて出会う仲間に対する緊張や不安を感じている。指導者は、野外生活でのストレスを軽減させるとともに、支持的な風土づくりや心地よい居場所づくりに努め、思いを出し合える雰囲気づくりに留意する必要がある。体験活動では、楽しいことばかりでなく困難にも出会う。この体験活動を通して、子どもたちは、自分の思いを出し合い、協力して課題を乗り越える体験を積み重ね成長していく。

(ア) チャレンジプログラムの実践事例

ロッククライミングというプログラムでは、子どもたちが大きな岩の壁を前に、不安な表情になったとき、「どこまで行くか、どこを通るかは、自分で決めてよい」と説明し、個人の目標設定をするように促した。チャレンジプログラムに参加する際の目標を「すぐにあきらめないで挑戦したい」と決めていたAさんは、「自分の力を出し切って行けるところまで行く」という目標を設定した。途中で岩にしがみついたとき、手にけがをしたが、そこで挑戦することをやめず目標を達成することができた。「自分でも上まで登れるとは思わなかった」と納得できる挑戦をしたことに対する達成感や充実感を味わい、仲間の支えや励ましも感じながら自己肯定感を高めている様子がうかがわれた。また、Aさんが仲間をロープで支える「ピレイヤー」の役になったときには、挑戦する仲間どんな援助をすることが一番適切であるかを考えながら、真剣な表情で仲間が挑戦する姿を見つめ続けていた。Bさんも、岩の上で動けなくなったとき、Aさんに支えてもらっていたことを実感し、感謝していた。

参加者がそれぞれの目標に向かって協力しながら活動することにより、そのプロセスを通して、場面に応じた励ましの声を掛ける等の対人関係能力を身に付けていくことができると感じた。

(イ) クエストプログラムの実践事例

バックパッキングという山歩きのプログラムでは、グループのメンバーが途中で歩けなくなったとき、グループ内で意見が衝突したため、「話し合いをしてはどうか」と投げ掛けた。荷物を分けて同じ重さを持つことが、全員にとって本当に平等だといえるのか、また、それ

によって「全員で前に進む」というグループの目標を達成できるのかについて真剣に考え始め、話し合いが行われた。グループの目標を達成するために、自分は何ができるのかを考えるうちに、学年の違いだけでなく、経験、体力、体格等の違いは、それぞれがもつ特性であるにとらえるようになった。グループで行動する際、Dさんは、Cさんが疲れて歩けなくなったため、Cさんの荷物を持つことを自分自身の挑戦にとらえて行動し、協力していこうという姿勢をもつことができるようになっていった。また、グループの到着地にたどり着けなかった日のミーティングでは、「全員が到着して、グループの目標が達成されたことになる」ということを確認したところ、話し合いでは、「みんなでゴールするなら、目標を少し近くにしよう。そうするとEさんも歩けるから」と、目標の見直しをした。翌日の活動を終えて、Eさんは、日記に、「目標まで歩くことができた。うれしかった。自分でも驚いた。」と自己肯定感を高めている様子が見られた。

このように、それぞれがもつ違いを認め、互いに受け止め合うことにより、「自分はここにいってもいいのだ」、「こんな自分でもいいのだ」と自分自身を肯定的にとらえることができるようになっていったと考える。また、話し合いにおいて、活動中にそれぞれが自分の思いを素直に出し合うことにより合意形成が図られ、個人や集団がよりよい方向へ向かうためのかわり方を学ぶことができた。さらに、仲間の励ましが挑戦する意欲を高め、自分自身や仲間への理解を深め、自己肯定感や対人関係能力を向上させるきっかけにもつながった。

(ウ) 日常生活における効果

長期自然体験活動後の参加者の感想に「あきらめないでチャレンジしたい」、「人と気軽に話したい」、「人の気持ちを察するようにしていきたい」等の記述があった。これは、参加者が体験活動を通して学んだことを、日常生活や人とのかかわりの中で主体的に生かしている意欲の高まりを示していると考えられる。

ウ 小学校での授業実践へ向けての留意点

長期自然体験活動の実践事例から、異年齢集団で体験活動を繰り返していくことは、自己や他者への理解を深め、互いを思いやる気持ちを育むことや、自分と他人の違いを肯定的に受け入れて、互いのよさを認め合うことに有効に作用していることが確認できた。このことから、個人と集団の成長のために課題解決のプロセスを重視した支援と安心して自分の思いを出し合うことのできる環境づくりが大切であると考え、小学校における異年齢集団での交流活動にもこの2つのことを生かすこととした(図2)。

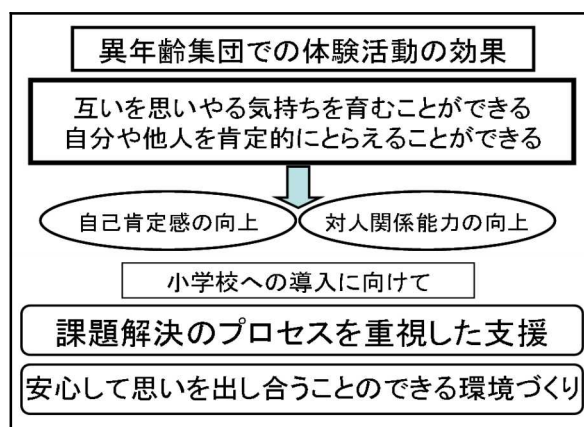


図2 小学校での授業実践へ向けての留意点

(3) 小学校における異年齢集団での交流活動

ア AFPYの活用

(ア) AFPYの主なねらい

AFPYの主なねらいは、具体的な体験活動を通して、一人ひとりが思いやりの心や挑戦する意欲を高めながら、互いの信頼関係を深め、対人関係能力を向上させることにある。また、AFPY

における冒険とは、自然の中での挑戦というよりも、身の回りに起こる出来事に対応していく自分自身への挑戦を意味している。このことから、小学校の異年齢集団の交流活動にAFPYを用いることにより、児童は楽しみながら他者とコミュニケーションを図り、自己や他者への理解を深めることができると考えた。

- (イ) 課題解決のプロセスを重視した支援
AFPYの活動においては、初めに自分やグループについての目標を設定する。次に、だれもが安心して活動に取り組めるように、互いを尊重し合うための約束を決める。教師は、活動の課題や条件、ルール等の説明をできるだけ分かりやすい言葉で簡潔に行う。その後、グループは、話し合いによって活動目標の設定や目標の見直し、課題解決の方法の変更をする。こうして自分たちで決めた課題解決の方法に基づきながら試行錯誤を繰り返し、課題解決に向かっていく。AFPYでは、課題解決のプロセスを重視しており、活動後の振り返りを通して、自己や他者への気付きを深め、次の活動へと生かしていく支援を大切にしている。このような活動の流れは、長期自然体験活動でも活用されている体験学習の循環プロセス(図3)と同様であることから、AFPYの活動において課題解決のプロセスを重視した支援を行うことにより、個人や集団の成長を促進させることが期待できる。

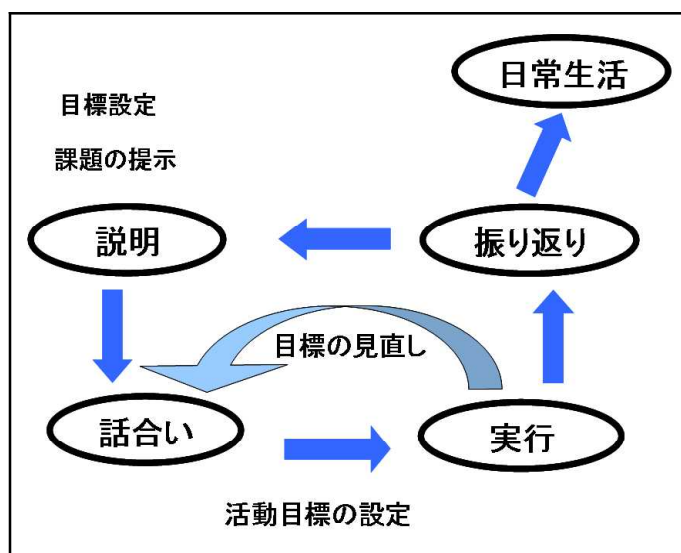


図3 体験学習の循環プロセス

め約束を決める。教師は、活動の課題や条件、ルール等の説明をできるだけ分かりやすい言葉で簡潔に行う。その後、グループは、話し合いによって活動目標の設定や目標の見直し、課題解決の方法の変更をする。こうして自分たちで決めた課題解決の方法に基づきながら試行錯誤を繰り返し、課題解決に向かっていく。AFPYでは、課題解決のプロセスを重視しており、活動後の振り返りを通して、自己や他者への気付きを深め、次の活動へと生かしていく支援を大切にしている。このような活動の流れは、長期自然体験活動でも活用されている体験学習の循環プロセス(図3)と同様であることから、AFPYの活動において課題解決のプロセスを重視した支援を行うことにより、個人や集団の成長を促進させることが期待できる。

- (ウ) 安心して自分の思いを出し合うことのできる環境づくり

AFPYの活動を通して、互いの在り方やかかわり方を尊重し合う約束をした上で、活動の中から共通点や合意点を見い出していくことにより、「心の安全」が保障された環境をつくることができる。「心の安全」とは、不安や緊張感がなく、だれもがリラックスして活動に取り組み、自分の思いを伝え、仲間に受け止めてもらえる安心感をもてることをいう。「心の安全」が保障された環境では、互いに心理的な緊張がなくなるため、ゆったりとした気持ちで、人の話に耳を傾け、自分の思いを伝えやすくなる。また、素直な気持ちで自分の内面と向き合い、新たな気付きも生まれやすい。したがって、AFPYの活動は、だれもが安心して自分の思いを出し合うことのできる環境づくりに役立つと考えられる。

イ 授業実践

異年齢集団での交流活動の組み立て方とその有効性について考察するために、原籍校(全校児童数26人)でAFPYを活用した授業(特別活動)を実施した。同校は小規模校のため、児童同士が家族的な雰囲気がかかわる機会はあるが、多くの人と活動する際には消極的な面が見られることがある。また、学級での活動だけでは、少人数であるために人間関係が固定化され広がりが少ないという現状もある。こうした現状や小規模校の課題、児童の実態を踏まえて目標を設定し、単元指導計画を作成した(図4)。授業実践においては、各学年の発達段階や生活経験の差に配慮し、各学級担任と情報交換をした上で活動内容を検討し、低学年でも無理なく活動できる学習過程を仕組んだ。

特別活動（学級活動）単元指導計画

1 単元名 みんなで楽しくチャレンジ！

2 単元の目標

- (1) AFPY（PAの手法を取り入れ、個人や人間関係のよりよい変容をめざして実施する山口県独自の体験活動）の活動を通して、人と触れ合い、互いを知り合う楽しさを味わう。
- (2) 異年齢集団での活動を通して、互いに感じたことを伝え合い、友だちと協力し、目標に向かって活動する充実感を味わう。

3 単元設定の理由

本校は、全校児童数26人の複式学級を含む小規模校である。少人数のため、児童同士が家族的な雰囲気がかかわることが多い。また、学級の係活動や委員会活動等において、一人ひとりに役割が与えられるため、力を発揮する機会に恵まれている。しかし一方では、交流学习等多くの人と活動する際に消極的な面が見られ、自分から人とかかわることに不慣れである。縦割り班活動では、班の構成メンバーが、顔なじみであるため、低学年児童にとっても人間関係に対する緊張感や抵抗は少ない。しかし、学校生活をよりよくするために、児童自らが課題を見つけ、解決していくことは少なく、自己中心的な言動が見られることもあり、協力して集団をよりよくしていこうという意識が高いとはいえない。

このような児童に、AFPYの手法を用いて異年齢集団での体験活動を行うことは、緊張した気持ちをほぐして人と積極的にかかわる楽しさを次第に体得させていくことができると考える。また、グループで課題解決のための話し合いを行うことで、互いの意見をよく聞き、互いの動きをよく見ることの大切さを実感させ、協力しながら目標に向かって活動する充実感を味わわせることができる。活動の過程で自分にできることや自分の役割について考えさせる経験から、自分や友だちのよさについての気づきが深まり、異年齢でのかかわりの中で互いに認め合う機会にもなると考える。

そこで指導に当たっては、以下3点に留意したい。

- ・一人ひとりの言動を把握し、グループの状況を的確にとらえ助言に生かすために、TTを活用する。
- ・異年齢集団での活動を効果的に行うために、低学年児童にも理解しやすい課題提示の方法や、ルールづくりを行う。
- ・課題に対して協力して解決する楽しさを味わわせるために、グループで決めたことに寄り添い、試行錯誤の過程を重視し、子どもの活動を見守る姿勢を大切にする。

4 指導計画（全4時間）

- | | |
|-------------------------|-------|
| 第1次 心を開いて触れ合う活動 | （2時間） |
| 第2次 グループで決定し課題解決に取り組む活動 | （2時間） |

図4 単元指導計画

(ア) 授業におけるAFPYの活動の組立て

AFPYの活動は、表1のように分類される。活動において大切なことは、1つの活動だけを取り上げて実施するのではなく、授業の目的や児童の実態に合わせて活動を組み立てることである。そのため、児童の実態や日常生活の様子を踏まえて、どんな活動が適切かを考えた。また、課題に対する児童の願いを指導者ができるだけ把握するように努め、指導計画を立てた。

表1 AFPYの活動分類と活動のねらい

活動分類	活動のねらい
知り合うための活動	<ul style="list-style-type: none"> ・互いに知り合うきっかけをつかむこと ・楽しみながら親しい関係を築くこと
緊張をほぐすための活動	<ul style="list-style-type: none"> ・苦手で恥ずかしいと感じても、積極的に行動できるようになること
意思疎通を図るための活動	<ul style="list-style-type: none"> ・互いに意見や感情を的確に伝えられるようになること
意志決定・問題解決のための活動	<ul style="list-style-type: none"> ・効果的にコミュニケーションを取って協力し合う経験をする
信頼関係を確認するための活動	<ul style="list-style-type: none"> ・冒険的な活動や挑戦を通して、自分は仲間を守られていることを実感すること

a 児童の実態や日常生活の様子に応じた活動の選択

この授業実践で初めてAFPYの活動を体験する児童が多いことや、全学年での活動であることから、不安や緊張感のある児童もできるだけ無理なく活動に取り組むことのできる内容が適切であると考え、第一次を「心を開いて触れ合う活動」と設定した。また、経験したことなら自信をもって取り組める児童が多い傾向があることから、ルールが簡単で自分の経験と結び付けやすい活動を選択した。そうすることで、「できそうだ、やってみよう」という思いをもてるように配慮した。「できそうだ」という気持ちをもつことは、活動に対する抵抗を少なくし、

活動から楽しさやおもしろさを味わうことになり、「やってみよう」という気持ちをもつことは、次の活動に挑戦する意欲を喚起することにつながる。

b 目的を明確にした活動の選択

第二次は、グループで決定し課題解決に取り組む活動とした。課題解決に取り組む活動は、グループによる挑戦であり、活動前や活動中にグループでの話し合いを必要とする。授業における主活動として課題解決に取り組む活動を設定し、主活動へ導くために必要だと思われる要素を考え、児童の学びが少しずつ深まるように活動内容を選択した。主活動に「パイプライン」という活動を設定し、そこでは、「約束を守ること」や「相手と協調すること」、「コミュニケーションを工夫すること」が活動に必要な要素ととらえ、それまでの活動を体験することを通して児童が学びを蓄積していくことができることをねらい、児童同士のかかわり合う場面が増えるように活動を組み立てた。

c 活動内容と活動のねらい

児童の実態や日常生活の様子を踏まえ、グループで課題解決に取り組む活動へ児童が挑戦するための学習過程にも配慮した上で、授業のねらいに沿って活動内容を選択し設定した(表2)。

表2 活動内容と活動のねらい

	活動内容	人数	活動のねらい(高めたい力 丸数字はP45の評価の内容参照)
第一次	フルバリューじゃんけん	2人 多人数	グループの約束をみんなで守り、相手や自分の立場を考えて活動する。(主として対人関係能力)
	かっぱおに	全員	失敗を恐れず挑戦し、周りの様子を見ながらルールを守って楽しく活動する。(主として活動に参加する意欲)
	仲間探し	6人	自分の伝えたいことを伝え、相手の言いたいことを受け止めながら楽しく活動する。(主として対人関係能力)
	3つの秘密	2人 全員	相手や自分の立場を考えて人とかかわり、なるべく多くの人と話そうとする。(主として対人関係能力)
第二次	パチパチインパルス	全員	目標を確認し、本時の心構えをつくる。(主として活動に参加する意欲)
	あいこじゃんけん	2人 多人数 全員	相手や自分の立場を考えて工夫しながら楽しく活動する。(主として対人関係能力)
	ラインナップ	13人 全員	コミュニケーションの取り方を工夫して自分のできることを考え、活動する。(主として課題解決力)
	パイプライン	全員	試行錯誤しながら自分の役割を果たし、協力して課題解決に取り組む。(主として課題解決力)

(イ) 教師の支援の工夫

a 異年齢集団で活動するための工夫

(a) 目標設定の方法

AFPYの活動において、自分はどのように活動したいか、また、どんな姿になりたいかについて、児童に個人の目標をもたせた。目標を自己決定させることは、低、中、高学年それぞれの児童が発達段階に応じた活動をすることにつながり、異年齢集団で無理なく活動できる支援にもなると考え、付せんを活用し簡単な言葉で紙に書いて常時見える所にはることにした。この際、縦割り班に分かれて活動したことにより、高学年児童は、低学年児童に助言し

ながら取り組み、異年齢集団での交流にもつながった。また、集団の目標について話し合わせ、目標達成へ向けて約束のキーワードを確認した。本実践では、教師が目標を示す具体物として箱を用意し、約束したキーワード、個人目標等を入れ、活動を重ねるごとに体験したことが蓄積されることをイメージさせる工夫をした。

(b) 活動形態とグループづくりの工夫

全学年が一緒に活動することを意識させることをねらい、円形に座るよう促した。円形に座ることは、互いに表情を確認することができる効果もある。また、異年齢集団であるため、低学年児童がルールや活動の仕方を理解できなくて不安になることが予想された。そこで、「右隣の人が違う学年になる」等の簡単な条件を設定し、異年齢の児童同士のかかわりを促進するような活動を取り入れた。その結果、活動に慣れてきたころ、「ここ、空いてるよ」、「ここにきていいよ」という相手を受容する声が聞かれ、周囲の様子を見ながら活動する児童の姿が見られた。ほかにも、活動する際の条件やルール等の説明をできるだけ分かりやすい言葉で簡潔に行い、低学年児童と高学年児童をペアにして、ルールが分からないときに、高学年のリーダーシップが発揮できるように工夫した。

(c) 振り返りカードの工夫

児童に内省させることをねらい、振り返りカードを学年に合わせて作成した(図5)。低学年用には、他の学年の児童とかかわったことを思い出させ、それを児童が記述する欄も設けた。

b 温かい雰囲気づくりの工夫

授業実践では児童の自主性を育むために、教師の側から課題解決の方法を示すことや指示的な言葉をできるだけ使わないように努めた。また、児童の様子をしっかりと観察することに努めるとともに、その場で起きたことをできるだけ肯定的にとらえた言葉掛けに配慮した。しかし活動中、身体的・心理的な安全面で配慮が必要なときには、活動を止めて全員の話合いを促した。例えば、児童に互いの話を聞く必要性を伝えたいとき、「聴く」とはどういうことか、第1学年児童にも分かるように漢字を分解してカードを提示して、どんな聞き方なら相互に尊重し合える聞き方になるかを考えさせ、次の活動へも生かしていくことができるようにした。

ふりかえりカード	低学年用
月 日	なまえ
1 じぶんのめあてはなんでしたか？	<div style="border: 1px solid black; height: 20px; width: 100%;"></div>
10てんまんてんでいうとどのくらいもれたかな？	<div style="border: 1px solid black; height: 20px; width: 100%;"></div> <div style="text-align: right; padding-right: 5px;">てん</div>
2 きょうのかつどうはたのしかったですか。いちばんちかいものに をつけましょう。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> とてもたのしかったです たのしかったです あまりたのしくなかった たのしくなかった </div>
3 きょうのかつどうで、たのしかったことはどんなことですか。	<div style="border: 1px solid black; height: 40px; width: 100%;"></div>
4 きょうのかつどうで、しんせつにしてもらったことをおもいだしてみましょう。それはどんなことですか。	<div style="border: 1px solid black; height: 40px; width: 100%;"></div>

図5 振り返りカードの例(低学年用)

(ウ) 学習指導案

a 本時案（第一次）

特別活動（学級活動）本時案		
1 「心を開いて触れ合う活動」 2 本時のねらい ・活動の中でみんなで決めたルールを大切にすることで、人とかかわる楽しさや温かさに気付くことができる。 3 学習過程		
学習内容・学習活動 活動のねらい(高めたい力)	予想される児童の心の動き	教師の働きかけ 評価 振り返りの視点
1 アイスブレイキング ・「じゃんけんゲーム」をする(10分) 【じゃんけんゲーム】 ①相手とあいこになったら次の人の所へ行ける。緊張している気持ちをほぐして楽しく活動し、本時の心構えをつくる。(主として活動に参加する意欲)	<ul style="list-style-type: none"> ・何をするのか。じゃんけんならできそうだな。 ・なかなかあいこにならないな。 ・相手の気持ちに合わせるようにしてみようかな。 ・あいこになったらうれしかったな。 	教師も入り、一緒にやってみせることで、緊張している気持ちをほぐし、楽しい活動をイメージできるようにする。 緊張している気持ちをほぐし、楽しんで活動していたか。 (表情、声)
全体での活動のときは、T1が指示を出し、T2は人数の調整や、児童の様子を詳しく観察しておく。グループの編成に応じて、T1、T2で担当のグループを決めてそれぞれが活動を行う。		
2 本時の内容の確認と目標設定 ・全学年で活動することを知り、どのように過ごしたいか考える。(15分) 【フルバリューじゃんけん】 ①ゲー・チョキ・パーのかわりにジェスチャーをみんなで決める。 ②相手を探してじゃんけんをする。 ③あいこになったら相手を知ることができる。グループの約束をみんなで守り、相手や自分の立場を考えて活動する。(主として対人関係能力)	<ul style="list-style-type: none"> ・けんかをしないで楽しく過ごしたい。 ・全学年なので、仲良くするようにしたい。 ・じゃんけんのゲー・チョキ・パーがジェスチャーに変わったただけだな。できそうだな。 ・どんなジェスチャーをするのがいいかな。 ・じゃんけんにしやすいジェスチャーを考えよう ・あいこになるようにするぞ。どうしたらいいかな。 	楽しい時間にするにはどうしたらいいか投げ掛け、活動を行う際の約束を確認する。 安全面(心と体)について話し、目標をもって安全に活動することを確認する。 ルールはじゃんけんゲームと同じで、みんなで考えて決めたジェスチャーでじゃんけんをすることを確認する。 相手や自分の立場を考えて人とかかわることができたか。 (活動の様子、表情) あいこになったとき、どんな気持ちになったか尋ねる。
3 交流活動 ・ゲーム「かっぱおに」をする。(20分) 【かっぱおに】 ①頭の上に紙皿を乗せて鬼ごっこをする。 ②タッチされたり、落ちたりしたら固まって動けなくなる。 ③だれかに拾って乗せてもらったら動くことができる。失敗を恐れず行動し、周りの様子を見ながらルールを守って楽しく活動する。(主として活動に参加する意欲)	<ul style="list-style-type: none"> ・落ちてしまったからだれかにとってほしいな。 ・タッチしようと思っていたら落ちてしまった。 ・自分で皿を拾ってはだめだな。 ・助けて欲しいときは声を出したらいいのかわ。 ・スピードに気を付けよう。 ・速さはどのくらいがいいかな。 ・みんなかたまってしまった。もう1回やりたいな。 	指示を少なくするようにし、温かい雰囲気づくりに努める。 説明のときには、ルールを確認できるように高学年と低学年をペアにする。 活動の中で交わされる言動に注意を払い、必要なときは活動を止めて確認する。 失敗を恐れず楽しんでいたか。 (活動の様子)
		どんなことをしたか、どんなことをしてもらったかたずねる。

<p>4 交流活動</p> <p>・ゲーム「仲間探し」をする。 (10分)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【仲間探し】</p> <p>1 教師が児童の背中にシールをはる。</p> <p>2 背中にはられたシールの通りに仲間に分かれる。自分の伝えたいことを伝え、相手の言いたいことを受け止めながら楽しく活動する。(主として対人関係能力)</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・ジェスチャーで教えてあげよう。 ・自分で連れて行ってあげよう。 ・自分は何か尋ねてみよう。 ・困っていたら、教えてくれてうれしかったな。 ・ 君は、同じ仲間の人を探そうとして動いていたな。 	<p>しゃべらずに活動するように伝える。</p> <p>仲間に分かれたら、シールの内容と合っているかどうか確かめる。</p> <p>自分の伝えたいことを伝え、相手の言いたいことを受け止めながら楽しく活動できたか。</p> <p style="text-align: center;">(活動の様子)</p> <p>仲間探しゲームが楽しくできたか振り返る。</p>
<p>5 交流活動</p> <p>・ゲーム「3つの秘密」をする。 (25分)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【3つの秘密】</p> <p>1 3つの秘密をカードに書いておく。</p> <p>2 2人組になって秘密を紹介し合い、カードを交換する。</p> <p>3 カードの人になりきり、秘密を紹介する次の相手を探して2)をする。</p> <p>4 最後に本物のカードの持ち主を探し、カードを返す。相手や自分の立場を考えて人とかかわり、なるべく多くの人と話そうとする。(主として対人関係能力)</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・交換したらその人になるのだな。 ・どんな秘密かな。 ・忘れそうだから、カードを見ながら話そう。 ・だれと交換しようかな。 ・質問もしてみようかな。 ・できるだけたくさん交換してみよう。 ・本当はだれの秘密なのかな。 ・探すのは大変だなあ。 ・困っているから教えてあげよう。 ・自分からカードをもらいに行こう。 	<p>ルール説明のとき、まずT1、T2で交換し、やり方を示す。カードを交換するとカードの人になりきることができることを1年生にも分かりやすく話す。</p> <p>なるべくたくさんの人とかかわるように促す。</p> <p>本物のカードの持ち主を探すときには、一旦活動を止めて、安全に気を付けながら行うように促す。</p> <p>相手や自分の立場を考えて人とかかわり、人と話すことができたか。</p> <p style="text-align: center;">(活動の様子、表情)</p> <p>何人の人と話げできたか振り返る。</p>
<p>6 活動の振り返り(10分)</p> <p>・本時の活動を振り返って感想をまとめる。</p> <p>・お楽しみレベルチェック</p> <p>・振り返りカード</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲームが難しそうだったけどやってみたら楽しかったな。 ・けがをせずに楽しくできたな。 ・たくさんの人と話すことができたな。 ・みんなで遊ぶのは楽しいな。 ・ のゲームがおもしろかった。 ・ 君が励ましてくれてうれしかった。 ・分からなかったところをさんが教えてくれた。 ・またみんなでやりたいな。 	<p>今日の活動について振り返りをさせる。</p> <p>どんな声が聞こえたか、どんな姿が見えたか、どんなことを感じたかを振り返るようにする。</p> <p>振り返りカードにも書けるよう助言する。</p> <p>相手や自分の立場を考えて活動し、楽しさを味わい、人とかかわるよさに気付くことができたか。</p> <p style="text-align: center;">(発言、振り返りカード)</p>

評価()内は、評価の方法と評価の内容の番号を表す。

高めたい力	評価の内容
活動に参加する意欲	決めた目標に向かって取り組もうとしている。 失敗を恐れず挑戦しようとしている。 楽しんで活動しようとしている。
対人関係能力	自分の伝えたいことを相手に伝えることができる。 相手の言いたいことを受け止めることができる。 相手や自分の立場を考えて人とかかわることができる。 感謝の気持ちを表すことができる。
課題解決力	適切な目標を設定している。 グループで話し合いをする際、しっかり聞いて自分ができていることを考えている。 試行錯誤をしながら課題解決に取り組んでいる。

b 本時案（第二次）

特別活動（学級活動）本時案		
1 「グループで決定し課題解決に取り組む活動」 2 本時のねらい ・グループで行う活動を通して、自分のできることを考え、友だちと協力して課題解決に取り組む、自分や友だちのよさに気付くことができる。 3 学習過程		
学習内容・学習活動 活動のねらい(高めたい力)	予想される児童の心の動き	教師の働きかけ 評価 振り返りの視点
1 本時の内容、目標の確認 ・前時に立てた目標を思い出す。 「パチパチインパルス」をする。 (10分) 【パチパチインパルス】 ①全員が輪になる。 ②手を一回たたき、時計回りで順番に回していく。 ③できたら、拍手2回 足踏みに挑戦する。 目標を確認し、本時の心構えをつくる。(主として活動に参加する意欲)	・途切れないように手をたたいていくようにしよう。 ・みんなの音も聞こえるかな。 ・順番が来るまでよく見ておこう。 ・今度ももっと楽しく過ごしたいな。一生懸命やろう。 ・前にやったときの約束を思い出そうようにしよう。 ・ちょっと緊張するな。 ・音が途切れず鳴るといいリズムだな。 ・もっと間を開けないで手をたたけるかな。	全員がそろっていることを確認できるように輪の状態に集中させるようにする。 違う学年の児童が隣になるよう輪の作り方を工夫し、低学年児童も参加しやすくする。 楽しい時間にするにはどうしたらいいか投げ掛け、前時に決めた約束を確認する。 様子を見ながら足踏みも取り入れる。 目標に向かって活動に参加していたか。(活動の様子)
全体での活動のときは、T1が指示を出し、T2は人数の調整や、児童の様子を詳しく観察しておく。 グループの編成に応じて、T1、T2で担当のグループを決めてそれぞれが活動を行う。		
2 交流活動 ・ゲーム「あいこじゃんけん」をする。(10分) 【あいこじゃんけん】 ①前回みんなで決めたジェスチャーでじゃんけんをする。 ②3回連続であいこになったら次の人の所へ行ける。相手や自分の立場を考えて工夫しながら楽しく活動する。(主として対人関係能力)	・あいこになるのは難しいな。 ・相手に合わせてみよう。 ・3回同じにするためにはどうしたらいいかな。 ・同じポーズになるとうれしいな。 ・人とぶつからないように気を付けよう。 ・何人とじゃんけんできるかな。	安全面（心と体）についても確認する。 指示を少なくするようにし、温かい雰囲気づくりに努める。 なるべくたくさんの人と活動するよう促すために教師も一緒に活動する。 相手や自分の立場を考えて工夫しながら楽しく活動できたか。(活動の様子) どうやったら連続であいこにできたか尋ねる。
3 交流活動 ・ゲーム「ラインナップ」をする。(20分) 【ラインナップ】 ①全員が輪になる。 ②基準点を決めて、名字の五十音順に並ぶ。 ③できたら、誕生日順を行う。 コミュニケーションの取り方を工夫して自分のできることを考えて活動する。(主として課題解決力)	・自分はどこへ行ったらいいのだろう。 ・隣は合っているかな。 ・合っているかどうか近くの人に聞いてみよう。 ・どこに入るか分からなくて困っている人はいないかな。 ・やった。できたぞ。 ・しゃべらないでどうやって伝えようかな。 ・教えてもらってうれしかったな。	ルールを常に確認できるように高学年と低学年をペアにする。確認できてから始めるようにする。 順に答え合わせをして、全員ができたときの喜びを味わえるようにする。 早くできたら、しゃべらないで次の課題に挑戦させる。 コミュニケーションの取り方や自分ができることを考えて活動できたか。(活動の様子) 自分は何をしたか、できたときどんな気持ちになったか振り返る。

<p>4 交流活動 ・ゲーム「パイプライン」をする。(40分)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【パイプライン】</p> <p>①太さや長さの違う半円の筒を全員が1つずつ持って並ぶ。</p> <p>②大きさや重さの違うボールを半円の筒に転がして隣の人の筒に送る。</p> <p>③協力して目的の所まで送る。コミュニケーションの取り方を工夫して自分の役割を果たし、協力して課題解決に取り組む。(主として課題解決)</p> </div> <p>5 活動の振り返りをする。(10分)</p> <p>・本時の活動を振り返って感想をまとめる。</p> <p>・お楽しみレベルチェック</p> <p>・振り返りカード</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・落とさないように気を付けよう。 ・なるべく隣の人が受けやすいようにしよう。 ・どこを通っているか見に行こう。 ・作戦を立てよう。 ・ボールが速く転がるから筒の傾け方にも気を付けよう。 ・1年生には、どれを持ってもらったらいいかな。どんな風にしたらやりやすいかな。 ・もっと速く入れるためにはどうしたらいいかな。 <ul style="list-style-type: none"> ・みんなでできたとき「やった！」と思ってうれしかった。 ・「こうしたらいいよ」とアドバイスしてもらったからできた。 ・君が励ましてくれてうれしかった。 ・応援してもらってうれしかった。 ・失敗してもあきらめなかった。 ・みんなで協力するとできた。 ・みんなでできて楽しかった。 	<p>全員で決めた約束を書いて入れておいた箱にみんなのエネルギーボールを送り込もうと投げ掛ける。主体的に考えて工夫できるように必要なルールだけを伝える。話合いが必要なときは十分に時間をかけるようにする。話合いのときに、失敗しても次に生かしたいことは何か、自分ができることでどんなことを考えたか等、話合いのポイントを助言する。進んで活動に参加し、自分にできることを考えて協力して活動することができたか。(活動の様子) ボールが落ちたとき、自分は何を考えたか何をしたら振り返る。</p> <p>今日の活動について振り返りをさせる。どんな声が聞こえたか、どんな姿が見えたか、どんなことを感じたかを振り返るようにする。振り返りカードにも書けるよう助言する。相手や自分の立場を考えて活動し、楽しさを味わい、人とかかわるよさに気付くことができたか。(発言、振り返りカード)</p>
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

ウ 授業の考察

(ア) 授業のねらいと児童の様子からの考察

第一次では、人とかかわる楽しさや温かさに気付くことをねらいとした。活動の前に、児童がどのように取り組みたいか考えるようにしたところ、「楽しく」「けがをしない」「なかよくする」等の目標が出てきた。活動中の約束を表すジェスチャーを決める際には、高学年児童が自然に話合いを進めようとする姿が見られた。この話合いは時間を要したが、低、中学年児童の意見を取り入れて合意形成を図ることができた。また、じゃんけんや鬼ごっこというなじみのある活動を設定したため、抵抗なく取り組むことができ、途中から笑い声が聞こえ、互いに声を掛け合う姿も見られるようになっていた。「かっぱおに」の活動では、「何度も友だちを助けた」、「助けてもらってうれしかった」、「『助けて』と、大きな声で言えた」等、活動を通して人とかかわるコミュニケーションの大切さに気付いている姿が見られた。

本時の支援の方法としては、活動への不安や緊張感をできるだけなくすことに努めた。例えば、フルバリュージャンケンの活動で話合いのときに「このジェスチャーは、ちょっと恥ずかしい」と中学年児童から意見が出された場合には、全員が合意するまで話し合うように促した。こうしたことから、温かい雰囲気づくりを行うためには、楽しい活動をイメージさせることだけでなく、互いが合意形成するまでしっかり時間をかけ、話合いを通して自分の思いが尊重されることが不可欠であると確認することができた。

第二次では、グループで課題解決に取り組む活動を通して、コミュニケーションを深め、協力することや互いのよさを見つけることをねらいとした。簡単なルールで取り組み、徐々に活動の難易度が上がっていくことにより、次第に意欲も高まった。振り返りでは、「成功して楽しかった」、「難しかったけど楽しかった」等の感想があり、活動に意欲的に参加し挑戦する楽

しさを感じていることがうかがえた。また、低学年児童が、高学年児童に感謝する場面や、「作戦を考えてくれた」、「何も言わずにてきばきと動いて協力してくれた」とグループにおける各自の役割に気付いた児童が見られた。本時では、話し合う場面が何度かあったが、活動中の言葉について注意が必要と考えたため、「けがをした人は見なかったが、心の中は安全だったか」と聞くと、児童は「心の中にけがをしても見えない」と気付き、言葉掛けの方法で「もう少し優しく言った方がよい」「責める言葉はよくない」等の意見が出た。振り返りカードにも「うまくいかないときには責めるよりどうしたらいいか考える方がいいと分かった」という感想があった。児童同士が互いにリラックスしてかかわり合えるようになってきたときこそ、教師がグループの状態や言動に注意を払うことが大切であることを実感した。

(1) 児童の感想からの考察

授業の始めに「心を開いて触れ合う活動」を取り入れたことで、児童は楽しさを味わい、次第に自分の思いを出し合いながら活動することができたということが児童の感想から分かった。「自分の意見を言えた」ことや自分の意見を仲間に受け入れてもらい、「言ってよかった」と感じられることは、児童にとって集団が居心地のよい、安心できる環境であり、その中で自己肯定感を高めることができたと考えられる。また、人とかかわる心地よさを味わい、緊張しないで楽しめた自分に気付き、多くの人とかかわる楽しさを実感する児童の姿も見られた。

「グループで決定し課題解決に取り組む活動」では、自分のできることを考え、協力して活動する大切さや、友だちのよさに気付いている感想があった。「他の人の意見をよく聞いて協力しようと思った」、「文句も言わずに一緒によく動いてくれた」、「6年生が作戦を考えてくれたからできたと思う」等、リーダーの役割と仲間に協力する立場としてのフォロアーの役割に児童が気付いたことや、互いの違いを受け入れてよさを認め合いながら活動する児童の姿から、AFPYの活動の中で、低学年や中学年の児童が思いを伝え、高学年の児童がそれをくみ取るような学びを繰り返していくことが、異年齢集団での人間関係づくりに効果的であったと考える。

高学年の児童の感想に「今回の遊びは低学年でもできるから全校集会のときにもできそうだ」と学校生活に生かしていこうとする記述が見られた。その他、「もっと話を聞くようにしたい」、「心が安全なら低学年・中学年・高学年は関係なく、みんな友だちだと思う」等の感想からも、学んだことを自分なりに日常生活へ生かそうとしている児童の意欲が読み取れる。

エ 教師の支援の在り方

授業実践では、安心して思いが出せる環境づくりに努め、児童の言動を逃さないようにするためにTTにより実施した。身体的・心理的な安全に配慮するために、2人で児童の様子を把握するのがよいと考えたからである。TTにより、グループの状態を見取り、児童のつぶやきをとらえてどのように支援していくかについて意見交換することもできた。今回、一緒に授業を行った学級担任は、学級での様子と併せて授業での児童の様子もしっかりととらえ、児童理解を深めていた。

また、児童が体験したことを次の活動へ生かすために、課題解決のプロセスを重視することを常に考えた。その1つとして、教師自身も集団に起きていることを肯定的にとらえていくことが大切だと考える。例えば、意思の疎通がうまくいかず、低学年児童が泣いてしまったことについて、「何か言いたいことがあるとみんなに伝えているのでは?」と投げ掛けた。また、ルールの勘違いがあり、人を責めるような言葉が出たときは、「みんなが嫌なことなら、みんなでもめる

きっかけになる」と投げ掛け、児童に振り返らせる視点を与えた。振り返りカードにも「今日は、ひどく言い過ぎたのでもっと優しく言うようにしたい」、「責める言葉をやめて、どうしたらよいか考えていけばよい」とあり、児童が考える機会となった。このような支援を続けることにより、児童が互いに理解し合い、自分や他人を肯定的にとらえながら、その場に応じて適切な行動を選択できるように主体的に学んでいくことができると考える。

授業後の振り返りカードに、活動から感じた自分の思いをカードの裏まで書いている児童がいた。振り返りカードに記入することは、児童が活動を振り返り、内省することにもつながる。自分のことや仲間のことについて一人で静かに考える時間を十分に確保することにより、児童一人ひとりが考えたことを日常生活や次の体験につなげていくことができると感じた。今回の授業を参観した教員からも、「児童に体験から考える機会を与え続けていくことが効果を生むのではないか」という感想があったように、学校生活の中で意図的・計画的に授業や活動を仕組み、異年齢集団での交流活動による人間関係づくりを進めていくことが大切である。

(4) 特別活動年間計画への位置付け

児童が学んだことを日常生活へ生かしていくことができるようになるためには、意図的・計画的に異年齢集団での交流活動による人間関係づくりを進めていくことが重要であることから、1年間の学校行事や特別活動の流れの中で、ねらいを明確にし、内容に意味をもたせて異年齢集団での交流活動にかかわる具体的な活動場面を取り上げ、効果的に取り入れていくことを検討した(表3)。

表3 交流活動年間指導計画(案)

学期	月	活動のねらい	異年齢集団での活動との関連 (具体的な活動場面)	活動例					領域例 (時間)	
				知り合うための活動	緊張をほぐすための活動	意思疎通のための活動	意志決定問題解決のための活動	信頼と共感のための活動		
1	4	仲間づくり 緊張をほぐして新しい仲間と楽しく活動する目標をもつ。	新しいメンバーと出会う。	ネームゲーム	みんなおに バナナおに	ヒューマンピンゴ	/	/	学級活動(1)	
	5	参加する 友だちのことを知る。自分たちのルールを自分たちでつくる。	・めあてを設定する。 ・班での活動を通して互いのことを知る楽しさを味わう。	パチパチインパ ルス	宇宙人おに	仲間探し			ピーピング	学級活動(1)
	6	協力して活動する ルールを守ってみんなで楽しむ。	・話し合いをしながら楽しく活動する方法を考える。 ・活動のめあての確認と約束をする。(竹太鼓練習)	竹太鼓の練習時を活用する。(例 楽器準備 リズム練習) 縦割り班を基本としてグループ編成をする。 簡単なリズムから始めて全員で音を合わせる。 できたら難易度を上げる。					学級活動(1) 音楽(1)	
2	7	相手のことを考えながら力を合わせる。	・楽しく活動しながら所属感を高める。(1学期の振り返り)	あにじゃんけん キャッチ	マンモスのウ イリー	ラインナップ カウントアップ	フープリレー	学級活動(1)		
	9	知り合いに 心を開いて触れ合う	・活動への意欲をもちたれども仲良くする。 (運動会応援合戦練習)	応援合戦を活用する。(例 ダンス 応援歌練習) 意見を交換し合いながら協力して活動する。 それぞれのめあてに向かって練習する。 振り返りをしながら目標達成度を確認し合う。					体育(2)	
2	10	信頼する 意思の疎通を図る。コミュニケーション工夫する。	・相手の気持ちを考えて行動し協力する。 ・運動会(縦割り班種目)へ参加する。	ミラーストレッチ	サムライ 乗ってみよう	ラインナップ 3つの秘密	ヒューマンノット	学級活動(1)		

原籍校は小規模校であり、運動会、音楽会等にも、全校での活動を取り入れることがある。その際、異年齢集団でかかわる場面で、PAの教育手法を取り入れた活動を年間計画に位置付けることにより、児童が学んだことを行事や学校生活の各場面で生かせると考える。例として、全校で行う竹太鼓のリズム練習を具体的な活動内容として取り上げ、計画に取り入れてみた。音を合わせるといことは、グループを意識しながら互いに意思の疎通を図る活動であり、各グループで決めた目標に向かって取り組み、協力しながら課題を達成していくという点でも、自分や仲間について深く考えることができる。この他にもPAの教育手法を取り入れた活動を学校行事や特別活動の具体的な場面で関連付けながら継続的に実施していくことは、児童の主体的な学びにつながると考える。

3 まとめと今後の課題

本研究では、安心して思いを出し合うことのできる環境づくりに努め、課題解決のプロセスを重視した支援に配慮しながら異年齢集団での交流活動を組み立てたことにより、児童は、互いに支え合う温かい雰囲気の中で人とかかわる心地よさに気付き、互いのよさを認め合い、自分も他人も肯定的にとらえることができるようになることが確認できた。このことから、異年齢集団での交流活動にPAの教育手法を用いることは、児童の対人関係能力を向上させ、自己肯定感を高めることに有効であることが分かった。また、学校での体験活動による人間関係づくりにおいては、児童に主体的な学びを促していくために、それぞれの違いを個性として認め合い支え合う支持的風土づくりに努めていくことが重要であると考えられる(図6)。

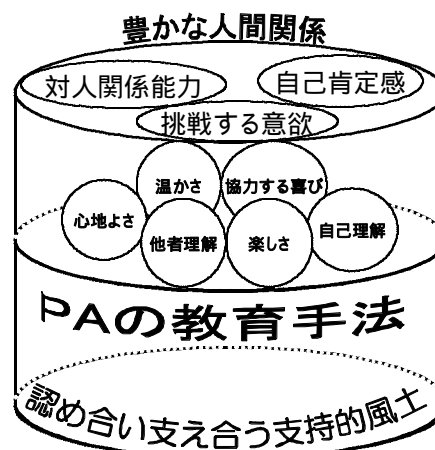


図6 PAの教育手法を用いた豊かな人間関係づくり

今後は、児童の学びを促進する体験活動の内容や支援の在り方について考え、異年齢集団での交流活動の継続的な実施に努め、実践を重ねていくとともに、学級内での人間関係づくりにもPAの教育手法を生かし、個人と集団の成長に生かしていきたい。

【参考文献】

- 成田國英 『「生きる力」を育てる異年齢集団活動の展開』 明治図書 1996
- ディック・ブラウティ他 『アドベンチャーグループカウンセリングの実践』 みくに出版 1997
- ウイリアム・J・クライドラー他 『対立がちからに』 みくに出版 2001
- 津村俊充 『子どもの対人関係能力を育てる』 教育開発研究所 2002
- 津村俊充・石田裕久編 『ファシリテーター・トレーニング』 ナカニシヤ出版 2003
- プロジェクトアドベンチャージャパン 『グループのちからを生かす』 みくに出版 2005
- プロジェクトアドベンチャージャパン 『クラスの間人間関係がぐ~んとよくなる楽しい活動集』 学事出版 2005
- 諸澄敏之 『みんなのPA系ゲーム243』 杏林書院 2005
- 山口県教育庁社会教育課 『平成15年度青少年自然体験活動推進事業報告書「チャレンジ&クエスト」』 山口県 2004

